

「欲望と呪縛の間に」

—第二稿—

2025/12/01

山極 瞭一朗

〈人物表〉

千木良 ちぎら 大鉄 だいてつ

(36) 記者

渡瀬 わたせ 紗季 さき

(26) 千木良の後輩、記者

一橋 ひとしほ 哲郎 てつろう

(62) 製薬会社社長

正木 まさき 玲奈 れいな

(28) 一橋の愛人

佐野 さの 琴美 ことみ

(27) 食堂店員

ドンと、勢いよく扉が開く。

正木玲奈（28）にキスをしようとしていた一橋哲郎（62）はハッとして動きを止める。

千木良大鉄（36）は入ると、すかさずカメラを構えてシャッターを切る。

一橋 「な、何してる」

ニヤリと口角をあげた千木良は一橋に近づき、その表情を写真に収める。

千木良「週刊新宝の千木良です」

一橋「くそっ」

一橋は千木良に掴みかかる。

グラスは床に落ち、パリンと割れる。

千木良、華麗に一橋をかわし、背後に回り込むと、腕を取り捻り上げる。

呻き声を上げて跪く一橋。

玲奈、わけがわからず逃げ出そうとする。

千木良「動かないで」

玲奈、ビクツとして制止。

千木良「警察来るから。ありのままを説明して」

玲奈「警察……」

千木良「飲んでないよね、それ」

テーブルには錠剤の入ったポリ袋がある。

玲奈は一瞥して、小刻みに頷く。

千木良「よかった」

一橋 「お前……」

千木良、ぐっと一橋を抑え込んで、

千木良「それ、合成麻薬」

玲奈 「え……」

千木良「製薬会社の社長が裏では麻薬捌いてるなんて、笑えない

でしょ」

と、一橋を蹴り上げる。

意識を失い、一橋は床に突っ伏す。

千木良「……自分のことは大切にしなきゃ。こんなやつのために

人生捨てちゃダメだ」

と、にっこりと微笑んで、立ち去ろうとする。

玲奈 「あ、あの……」

千木良 「そうだ」

千木良、思い出したようにきつと玲奈に近づいて、
名刺を握らせる。

千木良 「助けたお礼」

玲奈 「え？」

千木良 「してねって意味。そこに連絡して、独占取材させてよ」
と、再び微笑んで、颯爽と立ち去る。

玲奈、名刺に視線を落とし、くしゃっと握る。

2.

クラブ・廊下（夜）

渡瀬紗季（26）、啞然として立ち尽くしている。

床に倒れているいかにも体格のよきそうな男たち。

VIPルームから千木良が出てくる。

紗季 「千木良さん……」

千木良 「歩きにく」

と、男たちを跨ぎながら紗季に近づく。

紗季 「また勝手に」

千木良 「襲ってきたからね。正当防衛っしょ」

紗季、嘆息を漏らして、

紗季 「証拠は？」

千木良、カメラを紗季に渡して、

千木良 「ばっちり」

紗季 「私、いた意味ありますか？」

千木良 「俺に何かあったら、紗季が証拠を押さえる。そうだろう？」

紗季 「そんな場面一度もない」

千木良 「まあいいじゃない。うまくいったんだし」

と、紗季の肩をポンと叩いて、

千木良 「それに、紗季は希望だから。いてもらわないと」

紗季 「何です、それ」

千木良、意味深にニヤリと笑って、

千木良 「じゃあ、行くとこあるから、お疲れ」

立ち去る。

紗季、不安げに千木良の背を見つめる。

3.

食堂近くの道（夜）

シャッター街の商店街の一角、明かりの灯る食堂がある。

店内は賑わっており、エプロンをつけた佐野琴美（27）がせかせかと動き回っている。

柱の陰から、千木良は琴美の様子を窺っている。その顔はどことなく険しく、憂いを帯びている。

琴美、ふと店の外を見ると、千木良と目が合う。

千木良、会釈。

琴美は眉をひそめて、店から出てくる。

千木良「ごめんね、仕事中に」

琴美「来ないでください。言いましたよね」

千木良、さっと鞆から厚みのある封筒を差し出して、

千木良「今月分」

琴美、押し返して、

琴美「いい加減やめてください」

千木良「俺が好きでやってることだから」

琴美「迷惑だと言ってるんです」

と、居心地悪そうに周囲を見渡して、小声で、

琴美「私は、あなたの呪縛を解き放つ道具じゃない」

千木良「そんなつもりは」

琴美「あります。……あるんです」

と、千木良を睨み、そしてそそくさと店に戻る。

千木良、ため息をつき、封筒をきゅつと握る。

4.

警察署・入口・外（昼）

多くの報道陣がカメラを掲げている。

その中に、千木良と紗季。

紗季、千木良をチラッと見て、

紗季「また琴美さんですか」

千木良「ん？」

紗季「昨日、あのあと」

千木良「かなわないな」

紗季「千木良さんのせいじゃありません」

千木良「俺が殺したんだよ」

と、紗季を見て微笑む。

車が到着する。

一斉にシャッターを切る報道陣。

一橋が降りる。その手には布がかけられている。

千木良、カメラを構え、シャッターに指を置くが、押せない。

紗季、千木良を一瞥して、一橋にカメラを向ける。連写。

紗季「あいつの悪事を暴いたこと、それまで疑ってないですよ
ね」

千木良「心を読もうとするな」

紗季「救ったんです、千木良さんは。あいつに苦しめられた女性とこれから苦しむかもしれない大勢の人を」

千木良「……」

千木良、ニヤリと笑い、シャッターを切る。

5. 新宝社・外観（夕）

高層ビルの壁面に、『新宝社』のロゴがある。

6. 新宝社・あるフロア（夕）

薄暗い室内。

紗季、カタカタとPCに文字を打ち込んでいる。
そして、ふと手を止めると、席を立つ。

7. 新宝社・応接室（夕）

千木良と玲奈、向かい合わせで座っている。

千木良「では、取材を始めさせていただきます」

と、ICレコーダーのスイッチを入れる。

玲奈、唐突に立ち上がり、

玲奈 「どうして余計な事したんですか」

千木良 「はい？」

玲奈 「あいつとはうまくやってたのに」

千木良 「あなたまさか」

玲奈、レコーダーを一瞥して、

玲奈 「知るわけないでしょ、薬作ってたなんて」

千木良 「じゃあ」

玲奈 「助けたなんて思わないで。迷惑してるの。それだけ伝えに来た」

と、そそくさと立ち去る。

8.

新宝社・廊下（夕）

紗季が歩いてくる。

応接室から玲奈が出てくる。

紗季 「正木さん？」

玲奈、無視して立ち去る。

紗季が怪訝そうにしていると、千木良が出てくる。

紗季 「どうかしました？」

千木良、紗季の傍を通り過ぎて、

千木良 「どんなクズでも俺たちに人生を壊す権利はないってことだ」

紗季 「え？」

千木良 「俺は欲望のままに誰かの人生を壊してただけかもしれないね」

と、向こうに歩いていく。

紗季 「……千木良さん」

千木良、ピタッと止まる。

紗季 「辞めるつもりですか」

千木良、振り向かず黙って奥に消える。

紗季、もの悲しそうに千木良の背を見つめ続ける。

（おわり）